

三つの経済学革命とその伝承(II)

甲斐原 一 朗

【VII】価格の成立・変動の法則（ワルラス）

多数商品間の交換の場合でも二商品の場合と同じく，部分的有効需要の方程式は欲望の最大満足条件によって数学的に決定される。それは‘常に任意の二商品の稀少性の比がこの二商品の一方で表した他方の価格に等しい’ことである。（もしこれらが等しくなければ，この両者を交換すれば利益がえられる。）

各交換者が‘ただ一つの’商品を所有し，かつ裁定をさせる目的で m 個の商品の二つずつで $m(m-1)$ 個の価格を叫んだとし，①これらが一般均衡条件に適ったものでなければ，各交換者に最大の満足が生ずるのは，各交換者が需要する商品の稀少性との比が（叫ばれた価格ではなく）裁定によって得られた真の価格に等しいときである。②しかし交換者が多数商品の所有者であり，（裁定が生じないことを欲して）価値尺度財として採択された m 番目の商品で表した $(m-1)$ 種の商品の価格 $(m-1)$ 個を叫ぶとすれば，（任意の二商品の中の一方で表した他方の価格は，価値尺度財で表した二商品のそれぞれの価格の比に等しくなければならないから）各交換者に最大満足が生ずるのは，価値尺度財以外の商品の稀少性とこの価値尺度財の稀少性との比が叫ばれたそれぞれの価格に等しいことである。数式的には次のように解析される。

交換者(1)はAの $q_{a,1}$ 量，Bの $q_{b,1}$ 量……の所有者であるとする。彼に対する一定期間の商品 A, B, …の効用曲線（欲望曲線）はそれぞれ $r = \phi_{a,1}(q)$, $r = \phi_{b,1}(q)$, …, Aで表したB, C, …の価格を p_b, p_c, \dots とする。そして価格が p_a, p_b, \dots であるとき，この交換者(1)が自分で所有していた量 $q_{a,1}, q_{b,1}, \dots$ に加え

る A, B, … の量をそれぞれ x_1, y_1, z_1, \dots とする。(これらの量は正のとき需要量, 負のとき供給量を示す。交換者がある商品を需要するためには等価量の他の商品を供給しなければならないので, あるものが正であれば, 他のものは負となる) そして一般に総ての量の間に

$$x_1 + y_1 p_b + z_1 p_c + \dots = 0$$

が成立し, さらに最大満足の状態が仮定されているので, 一組の方程式

$$\phi_{b,1}(q_{b,1} + y_1) = p_b \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1)$$

$$\phi_{c,1}(q_{c,1} + z_1) = p_c \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1)$$

.....

すなわち (m-1) 個の方程式があり, これらは前式と合わせて m 個の方程式の体系を構成する。これらの方程式から (m-1) 個の未知数 x_1, y_1, z_1, \dots を順次に消去すれば, m 番目の未知数を諸価格の関数として表す一個の方程式だけが残る。こうして交換者(1)による B, C, D, … の需要または供給を表す方程式

$$y_1 = f_{b,1}(p_b, p_c, \dots)$$

$$z_1 = f_{c,1}(p_b, p_c, \dots)$$

.....

がえられ, 同じ交換者による A の需要 or 供給は

$$x_1 = -(y_1 p_b + z_1 p_c + \dots)$$

で与えられる。同様にして交換者(2), (3), … による B, C, … の需要 or 供給を表す同様な方程式がえられ, さらにこれらの交換者による A の需要 or 供給は

$$x_2 = -(y_2 p_b + z_2 p_c + \dots)$$

$$x_3 = -(y_3 p_b + z_3 p_c + \dots)$$

.....

で与えられる。こうして総ての交換者の値付けの性向は, 種々の商品の彼ら一人一人に対する効用と, 彼ら一人一人が所有するこれら商品の量から導きだされる。しかしここでなお重要な問題がある。

p_b, p_c, \dots のある値に対して, y_1 が負であることがありうる。これは交換者(1)が B を需要しないで供給する場合である。さらに, y_1 が $-q_{b,1}$ に等しいこ

とさえありうるが、それはこの交換者がBを残して置かない場合である。 y_1 のこの値を、最大満足を表す(m-1)個の方程式体系に代入すると

$$\begin{aligned}\phi_{b,1}(0) &= p_b \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1) \\ \phi_{c,1}(q_{c,1} + z_1) &= p_c \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1) \\ &\dots\dots\dots\end{aligned}$$

がえられ、これらの式と $x_1 + z_1 p_c + \dots = q_{b,1} p_b$ とから p_b, p_c, \dots を消去すれば

$$x_1 \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1) + z_1 \phi_{c,1}(q_{c,1} + z_1) + \dots = q_{b,1} \phi_{b,1}(0)$$

がえられる。ワルラスはこの式は次の条件を表す方程式だとする。すなわち

‘諸商品の中の一商品の供給が、この商品の所有量に等しいためには、需要される諸商品の欲望曲線の包む面積の中で、すでに所有している量によって充たされた欲望を表す部分より上方にある部分の中に長方形を描き、それらの長方形の面積の合計が、供給される商品の所有量を高さとし、この商品の最大欲望の強度を底辺とする長方形の面積に等しくなければならない’

ところでこの条件は充たされることもあれば、充たされないこともある。そうだとすれば、交換者(1)によるBの供給は、ある場合には自分が所有する量 $q_{b,1}$ に等しいことが可能である。しかしこの供給はこの量より大ではありえない。(注意すべきは、Bの需要または供給を表す方程式において、負の y_1 を $q_{b,1}$ より大ならしめるような総ての p_b, p_c, \dots の総ての値に対して、この方程式は $y_1 = -q_{b,1}$ によって置き換えられねばならないということである)

しかしこれが総てではない。① p_b, p_c, \dots が負の $z_1 \dots$ を $q_{c,1}, \dots$ より大ならしめるような値をとる場合のC, \dots の需要 or 供給の方程式についても同じことがいえる。②これらの方程式が $z_1 = -q_{c,1}, \dots$ によって置き換えられない場合には、Bの需要 or 供給の方程式も修正されねばならない。(たとえば $z_1 = -q_{c,1}$ であれば、交換者(1)によるBの需要 or 供給の方程式体系は

$$\begin{aligned}x_1 + y_1 p_b + \dots &= q_{c,1} p_c \\ \phi_{b,1}(q_{b,1} + y_1) &= p_b \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1) \\ \phi_{d,1}(q_{d,1} + w_1) &= p_d \phi_{a,1}(q_{a,1} + x_1) \\ &\dots\dots\dots\end{aligned}$$

となる。全部で $(m-1)$ 個の式であるが、この方程式から $(m-2)$ 個の未知数 x_1, w_1, \dots 個の未知数を順次に消去し、 y_1 を p_b, p_c, \dots の関数として示す一つ
の方程式しか残らないようにする。③商品 C, D, …の中の一つの商品だけでなく、二個、三個、…そして一般に任意の多数の商品の供給が所有量に等しい場合も同様である。

ついで価値尺度財である商品 A の需要・供給の式を問題とする。

A で表した B, C, …のある価格 p_b', p_c', \dots が叫ばれたとき、‘総ての商品の
需要量と供給量’が、‘供給量と所有量が等しい’という事実を考慮しながら、
完全に決定されることに留意して解析される。

$q = \phi_{a,1}(r), q = \phi_{b,1}(r), q = \phi_{c,1}(r), \dots$ を、交換者(1)に対する A, B, …の効用
の方程式であるが、量について解かれたものであり、稀少性について解かれた
ものでは‘ない’とする。交換の後には ……

$$q_{a,1} + x_1' = \phi_{a,1}(r_{a,1}')$$

$$q_{b,1} + y_1' = \phi_{b,1}(r_{b,1}')$$

.....

が成立し、そのほかに交換される量が等価値であるという条件と最大満足の条
件により

$$q_{a,1} + p_b' q_{b,1} + p_c' q_{c,1} + \dots = \phi_{a,1}(r_{a,1}') + p_b' \phi_{b,1}(p_b' r_{a,1}') \\ + p_c' \phi_{c,1}(p_c' r_{a,1}') + \dots$$

がえられ、これから $r_{a,1}'$ がえられる。さらに $r_{a,1}'$ を用いて $r_{b,1}', r_{c,1}', \dots$;
 x_1', y_1', \dots がえられる。保留せられまたは獲得される商品は、充たされるべき
最終の欲望強度が価格と $r_{a,1}'$ との積より大きいものだけである。(もし $r_{a,1}'$
が A の最初の欲望の強度よりも大であれば、交換者(1)は価値尺度財である商品
を需要もしなければ保留もしない)

ついで交換者(1), (2) …による A, B, C, …の需要 or 供給の方程式が上記の制
限を満たすように組み立てられるとして

$$X = x_1 + x_2 + x_3 + \dots, Y = y_1 + y_2 + \dots, Z = z_1 + z_2 + z_3 + \dots, \dots$$

$$F_b = f_{b,1} + f_{b,2} + f_{b,3} + \dots, F_c = f_{c,1} + f_{c,2} + f_{c,3} + \dots, \dots$$

と表せば、商品 A, B, C, … の需要と供給の均等条件は $X=0, Y=0, Z=0, \dots$ によって表せるから、均衡価格について $(m-1)$ 個の方程式

$$F_b(p_b, p_c, \dots) = 0, \quad F_c(p_b, p_c, \dots) = 0, \dots$$

が成立する。ところで p_a, p_b, p_c, \dots は本質上正であるから、 $Y=0, Z=0, \dots$ であれば $X=-(Yp_b+Zp_c+\dots)=0$ も成立する。(上述の多数商品間の交換問題が、どのようにして市場において競争のメカニズムによって経験的に解かれているかについての説明は省略する)

これらを要約してワルラスは‘均衡価格成立の法則’を次のように定立する。

‘多数の商品が与えられそれらの交換が価値尺度財の仲介によって行われるとして、これらの商品に関して市場の均衡(いい換えれば価値尺度財で表したこれらの総ての商品の定常価格)が成立するためには、これらの価格において各商品の有効需要と有効供給が等しいことが必要かつ十分である。この均衡が存在しない場合に均衡価格に達するためには、有効需要が有効供給より大きい商品に価格の騰貴がなければならず、また有効供給が有効需要より大きい商品に価格の下落がなければならない。’

さらに‘自由競争の市場における多数商品相互間の交換は、これによってこれら商品の一つ(または複数の、または総ての種類)の所有者の総てが欲望の最大満足を得ることができる行動である。ただしこの欲望の最大満足は、任意の二商品が共通で同一の比率で互いに交換されるだけでなく、この二商品が他の任意の第三の商品と交換されて、それぞれの交換比率の比が最初の二商品間の交換比率と等しくならねばならないという条件に従うものである’と定義される。価格を価値尺度財で表して叫ぶならば、一般均衡の条件はまさにこの事実によって充たされる。いい換えれば、この条件は裁定を通じて実現されるのである。

交換者(1)をAの、(2)をBの、(3)をCの所有者とし、 $r_{a,1}, r_{b,1}, r_{c,1}, \dots; r_{a,2}, r_{b,2}, r_{c,2}, \dots; r_{a,3}, r_{b,3}, r_{c,3}, \dots; \dots$ をこの三人に対するA, B, C…の稀少性とし、それは価格に応じて変化するものとする。①裁定が起こり得ないときは、最大満足の条件は

$p_{b,a}=r_{b,1}/r_{a,1}$, $p_{c,a}=r_{c,1}/r_{a,1}$, \dots $p_{a,b}=r_{a,2}/r_{b,2}$, $p_{c,b}=r_{c,2}/r_{b,2}$ \dots ; $p_{a,c}=r_{a,3}/r_{c,3}$, $p_{b,c}=r_{b,3}/r_{c,3}$, \dots である。②裁定が可能であるとし3つの商品と3人の交換者に限定して考えれば、裁定前には、 $r_{b,1}/r_{a,1}=p_{b,a}=1/p_{a,b}$, $r_{c,1}/r_{a,1}=p_{c,a}=1/p_{a,c}$, $r_{c,2}/p_{b,2}=p_{c,b}=1/p_{b,c}$ が成立しているが、裁定後の一般均衡状態においては、これに加えて

$r_{b,2}/r_{a,2}=p_{b,a}$, $r_{c,1}/r_{a,1}=p_{c,a}$, $r_{c,2}/p_{b,2}=p_{c,b}$ が成立する。このことは多数の交換者と商品の場合に拡張できて、‘市場が一般均衡の状態にあるときは、任意の二商品の稀少性の比は、相互間の価格に等しく、この比はこの二商品の総ての所有者について同一である’といえる。

以上では無限小の消費が可能で、連続的な効用曲線をもつ商品と考えたが、性質上ある単位づつしか消費できない商品もある。(たとえば家具・衣服)このとき最初の衣服の効用と二番目・三番目のものの効用の間には強度の差がある。すなわち不連続の効用曲線が現れるが、ここで‘平均稀少性’が定義される。所有量の増加は結果として稀少性を減少せしめ、所有量の減少は稀少性を増加せしめる。そして稀少性が減少 or 増加すれば、価格が下落 or 騰貴するから、次の法則が成立する。すなわち‘交換が価値尺度財の仲介で行われる市場において多数の商品が均衡状態において与えられるとき、(他の事情は同一で)一商品の効用が交換者の一人 or 多数に対し増加 or 減少すれば、価値尺度財で表したこの商品の価格は増加 or 減少する。またもし他の事情が同一で、一商品の量が所有者の一人 or 多数において増加 or 減少すれば、この商品の価格は減少 or 増加する。’

ただし価格の変化は必然的に価格要因の変化を示すが、価格変化のないことは、必ずしも価格要因に変化がないことを示すものではなく、次の二つの命題が成立する。すなわち① ‘多数の商品が与えられるとき、その中の一商品の量が、交換者 or 所有者の一人 or 多数において諸商品の稀少性が不変であるように変化するならば、この商品の価格は変化しない。’ ② ‘総ての商品の効用と量が、交換者 or 所有者の一人または多数に対し、稀少性の比が不変であるように変化するならば、これらの商品の価格は変化しない。’

これが‘均衡価格変動の法則’である。これを均衡価格立の法則と結合すれば、経済学において‘供給と需要の法則’と呼ばれる法則の科学的な方式が得られる。最も基本的な法則でありながら、これまでは無意味なまたは誤った表現しかあたえられていなかったし、ワルラスは数学的形式が純粋経済学にとって可能な形式であるだけでなく、必要不可欠な形式であることを強調している。

【Ⅷ】ワルラスのスミスおよびセイ批判

三つの革命は当然のことであるが、古典派経済学の批判から出発する。ただそれぞれが批判の重点をどこにおいたかは、革命の基本的方向を示唆するものとして重要であろう。

ワルラスは交換価値の原因についての三つの学説をあげる。第一は、スミス、リカード、マカロックのイギリス学派である。それは価値の原因を‘労働’に求めるが、これは狭すぎて真に価値をもつものについて価値の存在を否定しているとする。第二は、コンディアックおよびセイのフランス学派である。ここでは価値の原因を‘効用’におくが、これは広過ぎて、実際には価値をもたないものにも価値を認めることとなる。第三はプルマキおよび彼の父 A. ワルラスで、それは適切だとする。

スミスは‘国富論’第一編第五章で次のようにいう。「それぞれのものの真の価格、それぞれのものがこれを獲得しようとする人に実際に費やせるものは、彼がこれを獲得して消費するか、または他のものと交換しようとする人に対して実際にどれだけの価値をもつかは、それを持つことによって彼が節約しうる、あるいは他人に転嫁できる苦痛と面倒さによって測られる。（貨幣または商品で買うものは、額に汗して獲得するものと同じく労働によって買われるものである）この商品と貨幣は実際にこの苦痛を節約する。それらは一定量の労働の価値を含んでおり、それを等しい量の労働の価値を含むと考えられるものと交換するのである。労働は最初の価格であり、総てのものの原本的購買のために支払われる貨幣である。世界の総ての富が原本的に買われるのは、金や銀によ

るのではなく、労働によってである。これらを所有し、そしてこれを新しい生産物と交換しようとする人に対してのそれらの価値は、それが購買または支配しうる労働の量とまさしく相等しいのである。」

これに対しスミスを批判する人々は、価値があり交換されても労働の生産物でないもの、すなわち労働以外に社会的富を構成するものがあることを主張する。しかしワルラスは、この批判は‘皮相的’であるとして斥ける。種々の場合において、‘なにゆえに労働に価値があり交換せられるか’が重要な問題である、スミスはこの問題を提起もしなければ、解決もしなかった。労働が価値をもち交換されるとすれば、それは労働が効用をもち、量において限られているすなわち‘稀少である’からである。ゆえに価値は稀少性からくるものであり、稀少なものの総ては労働を含むと否とかかわらず、労働のように価値をもち交換せられる。ワルラスは、価値の原因を労働であるとする理論は狭過ぎるというよりは、内容のない理論であり、不正確で根拠のない断定であると批判する。

ついでセイを批判する。セイは「経済学問答」第二章において‘なにゆえにあるものの効用がこのものに価値を生ぜしめるか’を問題とする。‘それはものもっている効用はこのものに対する欲求を生ぜしめ、その獲得のために人々に犠牲を払うようにさせるからである。……自分が欲望を感じるものを獲得するためには、自分が所有するもののある量（たとえば貨幣の一定量）を与えるのであり、これが価値を生ぜしめるのだ’という。

これは証明の一つの試みとはいえるが、極めて不十分だとワルラスはいう。効用はそれをもつものに対する欲求を生ぜしめることは確かではあるが、それを獲得するために自分が所有するもののある量を与えるのは、それを得るためになにものかを交換に与えねばならないときに限る。従って効用だけでは価値を創造するのに不十分であり、さらに効用あるものが“稀少”であることを必要とするとワルラスはいう。‘呼吸される空気、風車を回す風、果実を実らせる太陽熱等多くの自然力は効用をもち必要でもあるが、価値をもたない。なぜならそれは無制限に存在し、これと交換になんらの犠牲を払うことなく、欲す

るままに得られるからである’。ただしセイは別な形で考えている。彼によれば、呼吸する空気、太陽の光線、河川の水は効用があり、それゆえ価値をもつ。それらはその価値が莫大であり無限大である程に効用があり、必要不可欠なものである。われわれがなにも与えないでそれらを得るのは、まさにこの理由に基づくのであり、われわれが支払わないのは、その価格を支払うことができないからである。ワルラスは、‘この説明は巧妙であるが、空気、光、水に代価を支払う場合があるが、それはれらが例外的に稀少な場合である’という。

最後に優れたものとしてブルマキの‘稀少性理論’をあげる (*Elements du droit naturel*)。「固有で内在的な価格の基礎は、そのものの効用と稀少性である。私が効用というとき、それによって現実の効用に限らず、宝石の効用のように気まぐれ・空想的なものに過ぎない効用をも意味している。それによって何らの用途のないものが何らの価格も有しないと一般にいえるのである。しかし効用が現実存在していても、効用だけではものに価格を生ぜしめるには足りない。さらにものの稀少性（それを獲得するための困難と欲するだけの量を容易には得られないという困難）を考える必要がある。……また稀少性だけでは価格を生ぜしめるには不十分で、その外にこのものになんらかの用途がなければならない。これが価格の基礎であるから、価格を増加しあるいは減少せしめるのもこれらの事情を結合したものである。（流行が去れば以前どれほど高価であっても価格が下がり、反対にあふれたもので費用のかからないものでも、稀少となれば価格をもちはじめ、ときには非常に高価となる）」

これが稀少性学説であるが、より深く進むためには、私がしたように‘数学的解析’の方法を用いる必要があるとワルラスはいう。ただし彼以前にもゴッセンとジェヴオンズは効用の逓減曲線（欲望曲線）を発表し、前者は効用最大の条件を、後者は交換の方程式をそれぞれ数学的に導きだしている。メンガーも交換理論を引き出す目的で、消費量の増加とともに欲望が逓減するという法則を立てて効用理論を構成しているが、彼は演繹的方法を用い、数学的方法を用いることに反対している。ワルラスはそれは貴重なそして不可欠でさえある手段を放棄したことになるという。しかし確実にいえることは、彼らが少なく

とも稀少性の理論すなわち彼らのいう‘限界効用の理論’に経済学者の注意を促すことに成功したことは高く評価できるとしている。

【IX】商品の二つの要因—使用価値と価値（M）

ワルラスの上述の理論は封建社会・共同体社会等を含めた‘総ての’社会を対象とするものであった。他方マルクスは資本主義社会に限定して考察することとして、‘商品’の分析から出発する。

古典派経済学も不十分ながら価値と価値量を分析し、その内容を発見したが、商品価値の分析から価値をまさに‘交換価値’たらしめるところの価値の形態を見付け出すことに成功しなかった。それが古典派経済学の根本欠陥であったとマルクスはいう。スミスやリカードのような最も優れたその代表者達においても、価値形態をば全くどうでもよいもの、あるいは商品そのものの本性にとっては‘外的’なものとして取り扱っている。その理由は、古典派経済学が‘価値の大きさ’の分析に注意を奪われていたということだけではないとして、次のように説明する。労働生産物の価値形態はブルジョア的生産様式の最も抽象的なしきたりした最も一般的な形態であって、これによってこの生産様式は社会的生産の特殊な一種類として、従って同時に歴史的に特徴づけられているのである。そこでこの生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的に価値形態・商品形態の、さらに発展しては貨幣形態、資本形態等の特殊性を見損なうことになるのである。価値規定の内容と区別して価値形態を把握するということは、資本家的生産様式を特殊歴史的な生産様式として把握することと根本的な関連をもつのであり、従ってマルクス経済学を古典的経済学と区別する決定的なメルクマールをなすのである。（経済学批判で価値形態はなおこのようなものとしては位置付けられておらず）資本論における価値形態は画期的な意義をもつといえる。

資本主義社会における富は一般的に‘商品’として現れ、一つ一つの商品はその富の基本的形態であるとして、マルクスは商品の分析を進める。

商品はまず、人間の欲望を充すものであり、物の有用性がその物の使用価値

であるが、この有用性は商品として物を離れてはありえないから、商品としての物そのものが使用価値あるいは財である。いろいろな社会（たとえば奴隷性社会、封建社会、資本主義社会等）で、富はそれぞれ異なった社会的形態で現れるが、使用価値はつねに富の内容をなしている。とくに資本主義社会では使用価値は交換価値の素材的担い手となっている。

交換価値はまずある使用価値が他の使用価値と交換される量的比率として現れ、偶然的・相対的に定るもので、商品に内在的な交換価値なるものはありえないように思われる。しかしたとえば1クォーターの小麦は異なった量の他の諸商品X量の絹、Y量の金などと交換されるから、これらの諸商品は総て1クォーターの小麦の交換価値であり、従ってそれらは互いに等しい大きさの交換価値である。従って第一にある商品の一定の交換価値は一つの同等なものをあらわし、第二に交換価値は一般に使用価値とは区別されたその内容であるものの現象形態だということになる。交換関係はたとえば1クォーターの小麦 = a トンの鉄という等式で表せる。この等式は、同じ大きさの共通なものが二つの異なった物のうちに存在することを意味するが、この第三のものは小麦でも鉄でもなく、いずれも交換価値である限りこれに還元されるものでなければならない。そしてこの共通なものは商品の自然的属性ではなく使用価値とは関係ない。商品の交換関係の特徴は使用価値の捨象ということである。使用価値としては商品は相互に異質であるが、交換価値としては商品は互いに同質で、ただ量的にのみ異なることになる。

商品の使用価値を無視すれば商品に残るのはただ労働生産物という性質だけである。しかしこの労働生産物についても使用価値を捨象すれば、その労働は建築労働、紡績労働などの具体的な有用性はなくなり、抽象的な人間的労働に還元されてしまう。こうして労働生産物に残っている‘無差別的な人間的労働（すなわちその支出の形態にかかわらない人間的労働）の支出のただの凝固物というそれらに共通な社会的実体の結晶’が商品の価値なのである。

価値の実体がこのように把握されれば、ついで価値の大きさが問題となる。ある使用価値が価値をもつのは、抽象的人間労働がそれに対象化されているか

らだとすればこの価値の大きさは労働の量で測られ、労働の量は労働の継続時間で測られる。ここでは社会の総労働力が無数の個別的労働力から成り立っているとしても、一つの同じ人間的労働力とみなされるのである。個々の労働力は‘社会的平均的労働力’という性格をもち、一商品は、その生産が平均的（あるいは社会的）に必要な労働時間を要するものとして価値をもつのである。従って商品の価値の大きさは、その商品に投下される労働の量に比例し、労働の生産力に反比例して変動する。

ところで商品の価値と使用価値という二面性は、商品に含まれている労働の二面性を根拠とするものであり、この労働の二面は‘経済学を理解にとつての跳躍台である’として、マルクスはさらに考察を進める。一例として一着の上着は10エルレのリンネルの二倍の価値をもつとする。上着とリンネルは使用価値が異なるから、これを作る労働も裁縫と織布という異なる有用労働である。異なる使用価値（つまり商品）の総体は、異なる有用労働の総体（社会的分業）を表す。商品生産が存在するためには必ず社会的分業がなくてはならないが、逆に社会的分業があれば必ず商品生産が行われることにはならない（たとえば古代の共同体）

使用価値である商品体は自然にある素材と労働との結合であり、人間は生産においてただ素材の形態を変えることしかできず、しかもこの労働そのものも自然力に支えられている。（労働は素材的富の父であり、土地はその母である）

商品に含まれている労働は、使用価値との関係では質的に、価値との関係では量的にのみ問題となるのである。

ついでマルクスはいわゆる‘商品の謎’を問題とする。彼は商品の価値関係に含まれている価値表現を、その最も単純な形態から出発して展開された価値形態・一般的価値形態をたどりながら、最後に貨幣形態に到達することによってこの問題を開明する。

①マルクスはワルラス流の‘x 量の商品 A=y 量の商品 B’を‘単純な or 偶然的な価値形態’とし、A は自己の価値を B で能動的にしかし相対的に表すという意味で‘相対的価値形態’にあり、B は A の価値表現の材料として受動的

であり、‘等価形態’にあると定義する。②しかしAが等価形態におくのはBに限られることなく、何でもよくz量の商品A=u量の商品B, or=v量の商品C, ……というようにAの価値表現はいくらでも延長される単純な価値表現の列に転化される。ここでは二つの商品の量的関係はもはや偶然的ではなく、つまり交換が商品の価値量を決定するのではなく、商品の価値量が商品の交換関係を規制するということになる。(‘拡大・展開された’相対的価値形態)

③ついで‘一般的価値形態が現れる。これは最初の諸等式の総計であり、それぞれ逆の関係を含みz量のA=u量のB=v量のC……となる。ここではAの価値はいろいろな商品で表されても、つねに同じ大きさなのだからもはや偶然的関係ではなくなる。つまり交換が商品の価値量を決定するのではなく、商品の価値量が商品の交換関係を規制するのだということが明らかとなる。④第一形態の等式は‘逆の関係’を含んでいるから、逆の等式を総計すれば

$$\begin{aligned} & u \text{ 量の } B = v \text{ 量の } C \\ & \quad = z \text{ 量の } A \\ & \quad = \dots\dots\dots \end{aligned}$$

がえられる。(一般的価値形態)

形態1では労働生産物が偶然的に商品になる時期にしか現れない。形態2ではある商品の価値はそれ以外の他のあらゆるもので現されるから、形態1よりも価値の使用価値からの区別は完全である。形態3では諸商品はその価値を一つの商品で現しているから単純に現しており、同じ商品で現しているから統一的にあらわしている。ここでは商品世界の価値は一つの商品で表現され、あらゆる商品の価値は自己の使用価値からばかりでなく一切の使用価値から区別されており、あらゆる商品の価値はあらゆる商品に共通なものとして表現されている。ここではじめて現実に諸商品を価値として関係させ、互いに交換価値として現れさせるのであり、総ての商品が量的に比較されうる価値量として現れる。⑤どの商品でも他の総ての商品によって等価物として排除されれば、一般的等価物となりうる。この排除が最終的に一つの商品に限定される瞬間から、初めて商品世界の統一的相対的価値形態は客観的固定性と一般的社会的妥当性

とを得て、この商品は貨幣商品となる。商品世界の中で一般的等価物の役割を演ずることがこの商品の特殊な社会的機能、その社会的独占となるが、歴史的にこの特別な地位を獲得したのは‘金’である。そこで形態3におけるAのかわりに金とおけば

u 量の商品 B =

or v 量の商品 C = z 量の金 (貨幣形態)

がえられる。形態3→形態4の移行では本質的な変化は生じない。一般的等価物が社会的慣習のうちに金となっただけである。金はもともと商品であり、個別的あるいは特殊等価物として機能していたが、次第に一定の範囲で一般的等価物として機能するようになり、最後にこの地位を独占したとき貨幣商品となるのである。

さらにマルクスは貨幣・商品の謎のような性格（それを‘商品の物神性’とよんで）を特に他の非商品経済社会体制との対比において明らかにする。

商品が使用価値である限りその属性により人間の欲望を満たすのであり、また人間の労働の生産物としてはじめてかかる属性を受け取るという観点から考えてもなんら神秘的なところはない。人間がその活動によって自然材の諸性質を人間に有用なように変更することは感覚的に明白である。たとえば木材で机を作れば、木材の形態は変更されるが、机は依然として木材であり、ありふれた感性的なものである。しかしそれが‘商品’として登場するや、感性的で同時に超感性的なものに転化する。その足で地上に立つばかりでなく、他の総ての商品に対しては頭で立ち、一人でに踊り出すという奇妙な幻想が展開する。

こうして商品の神秘的な性格は、商品の使用価値から生ずるのでも、また価値規定の内容から生ずるのでもない。〔①生産的活動の内容・形式がいかに異なろうとも、本質的には頭脳・筋肉等の支出であることは生理学的真理である。②価値の大きさを規定する労働の量は、感覚的にも労働の質から区別された‘労働時間’であった〕

労働生産物が商品形態をとるや否や生ずる謎の性格は商品形態そのものから生ずるといわねばならない。人間の諸労働の同等性は、種々の労働生産物の同

等な価値対称性という物象的形態を受け取り、また労働力支出（時間的継続による）度量は労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、結局生産者たちの関係は諸労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。商品形態は①人間の労働の社会的性格を、労働生産物そのものの社会的な自然的属性として人間の目に反映させ②また総労働に対する生産者たちの社会的関係を、彼らの外部に存在する対象の社会的関係として反映させるのである。このことから、商品形態の神秘性が生まれるのである。人間の社会的関係を物の自然的属性として表すというこの‘置き換え’によって労働生産物は‘商品’になるのである。（これは光が物に反射して目に刺激を与える場合、視神経の主観的刺激としてではなく、外部にある物の形態として表れるのと同様である。しかしこの場合は実際に光が物から目に投げられるのであり、物と物との間の物的関係である。）

他方商品形態（従ってそれが自らをそこで表示する労働生産物の価値関係）は諸労働生産物の物理的な本性（およびそれから生ずる物的諸関係）とはなんの関係もない。それは人々の一定の社会的関係にはかならず、その関係がここでは人々の目には物と物との関係という幻影的な形態をとるのである。（類例としては宗教的世界があり、そこでは人間の頭脳の生産物が独自の生命を賦与されて相互にまた人々と結びあった自立的な姿態に見える。）商品世界では人間の手による生産物がそうであり、従ってこれを商品生産と不可分な‘物神崇拜’と名づけるのである。

商品世界のこの物神性は上述の分析で明らかになったように、商品を生産する労働の独自の・社会的性格から生ずる。使用対象が商品になるのは、それが互いに独立に営まれる私的労働の生産物であるからだが、この私的労働の全体が社会的総労働をなしている。ところが私的労働は、交換を媒介として初めて社会的労働の一環として実証される。従って私的労働が一面では具体的有用労働であり、他面では抽象的人間労働であるという二重性格も、私的生産者の頭脳には‘異なった労働生産物が共通の価値性格をもつ’という形で反映されるのである。従って労働生産物が価値として表れるのは、人間がその生産物を人

間労働の対象化された物として認められるからではなく、逆にその生産物を交換において価値として等置することによって、自分の労働を人間的労働として等置するのである。（人はこれを知らずに実行しているのであり）生産物の交換される割合がある程度慣習的に固定性をもつまでに発展すると、それは労働生産物の本性から生ずるようにみえ、実際にも価値の量は、交換者の意志、予知、行為に関係無く変動する。交換者たち自身の運動が物の運動の形を作り、交換者がこの運動を制御するのではなく、これによって制御されるのである。孤立的に営まれながら、しかも社会的分業の一環として全面的に依存しあう私的労働が、たえず均衡を保つのは、変動する交換比率によって、その生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、規制的自然法則として強力的に貫徹するからである。そしてこの認識が生まれるためには、完全に発達した商品生産が必要なのである。（人間生活の諸形態の科学的分析は、一般に現実の発展とは逆の道をたどるのであって、発展した結果から分析がはじまる。だから商品価格の分析が価値量の考察へ、また価値の貨幣による表現の究明が商品の価値性格の確定へと導くのであるが）しかしまさに商品世界の完成形態である貨幣形態こそが、かえって私的労働の社会的性格をおおいかくすのである。（資本論でも前述のように、商品論のなかで価値実態の把握が行われているために、資本主義社会ではない単純商品生産者の社会を想定して、ここに価値法則の純粋な展開を求めようとする見解の発生を許すのである。）

マルクスはこのため、ロビンソン→中世社会→家父長制的家族労働→社会的共同生産という順序で、非商品経済的關係を分析し、これらと商品経済社会との差異を明らかにしている。①ロビンソンはつつましやかではあるが、それでも種々の欲望を満たさねばならず、道具を作り、駱馬を馴らし、魚貝を採り、狩猟するというような種々の有用労働をしなければならぬ。彼はそれに喜びを見いだし、また必要に応じて、自分の時間を有用的労働の間に正確に配分する。ロビンソンと彼の手製の富たる諸物との間の関係は極めて簡単明瞭であるが、その中に価値の一切の本資的な諸規定が含まれている。②ロビンソンの明るい島から暗い中世に移る。ここでは（独立した人の代わりに）農奴と領主・家来

と諸侯・俗人と僧侶といった人格的な依存が物質的生産の諸関係を性格づけている。しかし人格的な依存関係が社会的基礎をなしているからこそ、労働および労働生産物はその現実性と異なった幻想的な姿勢をとる必要はない。それらは現身奉仕および現物給付として社会機構の中に入り込むのであり、（商品生産の場合のように労働の一般性ではなく）労働の自然的形態・労働の特殊性が直接に社会的な形態なのである。③共同的な・直接に社会化された労働を考察するためには、自家用のために穀物・家畜・糸・布・衣類等を生産する農民家族の素朴な家父長制的な労働が手近な一例となる。これらの物は家族労働の種々なる生産物として家族の前に現れるが、諸商品として対応しあうことはない。これらの生産物を生み出す諸労働（農耕・裁縫等）は自然発生的な分業をもつ家族の機能であるから、その自然的形態において社会的機能である。また性別・年齢別・季節変動等により変動する労働の条件は家族間の労働配分・労働時間を規制するが、時間的継続で測られる個人的労働力の支出は、個人的な労働力は本来的にただ家族の共同的労働力の一部として作用するだけであるから、諸労働の社会的規定そのものとして現象するのである。④最後に共同の生産手段をもって労働し、かつその個人的労働力を自覚的に‘一個の’社会的労働力として支出する（自由人たちの）一団体を考える。ここではロビンソンの労働に関する総ての規定が適用されるのだが、ただそれは個人的にではなく、社会的にである。ロビンソンの生産物は個人的な生産物であり、従って直接に彼のための使用対象であった。しかしこの団体の総生産物は一つの‘社会的’な生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立ち、その部分は依然として社会的なものである。そして他の一部分は団体成員たちにより生活手段として消費される。従ってそれは彼らの間で分配されねばならぬ。この分配様式は、社会的な生産有機体の種類およびこれに照応する生産者たちの歴史的な発展度につれて変動する。（商品生産と対比するため特に）各生産者の生活手段の分前は彼の労働時間により規制されとする。そうすると労働時間は一つの二重的役割を演ずることになる。その社会的・計画的な配分は種々の欲望に対する種々の労働機能の正しい比率を規制し、また労働時間は共同労

働に対する個人的参加の（従って総生産物のうち個人的に消費できる分前の）尺度として役立つ。この場合、人々の諸労働および諸労働生産物に対する社会的関連は生産においても分配においても透き通るように簡単である。

自分の生産物を商品とし、この物的形態において自分達の私的労働を同等の人間の労働として関係させる商品生産者の社会にとっては、抽象的人間を礼拝するキリスト教、とくにそのブルジョア的發展である新教、理神論などが最も適当な宗教形態である。古代アジア的、古代的ギリシャ・ローマなどの生産様式では生産物の商品化、商品生産者の存在は一つの従属的な役割をはたし、共同体が崩壊段階にはいるとその重要さを増して来る。本来の商業民族は古代世界の隙間に存在するに過ぎない。古い共同体が単純で透明な構造をもつというのは、まだ個人的人間が未成熟で人間関係が自然的種族関係から切り離されていないか、直接的支配隷属関係のうちにあるからである。このような共同体はまだ生産力の發展が低く、人間同士も人間と自然との関係もそれに制約されており、この制約性が古代の自然宗教や民族宗教に反映されている。人間同士の関係、人間と自然との関係が合理的になれば、現実世界の宗教的反射も消滅する。しかしそのためには一連の物質的条件が必要で、この条件は長い歴史的發展をとおして作り出される。

商品形態は最も単純だから、まだその物神性は見抜けるようにみる。しかし貨幣形態となると物神性も複雑でわからなくなる。重金主義の幻想がそれで、近代経済学も重金主義を冷笑するが、資本になるとたちまち物心性にとらわれる。‘地代は土地から生まれるもので、社会からではない’という重農主義の幻想が消えてからまだいくらかたっていない。商品にものがいえるとすれば、‘使用価値は物としてのわれわれに属しないが、価値はわれわれに物的に属する’というだろう。経済学はこれを、‘価値は物の属性であり、富（使用価値）は人間の属性である’と代弁する。彼らの見解は、物の使用価値は物と人との直接関係で人間によって実現され、価値は物と物との交換においてのみ実現されるという特異の事情によって裏づけられているのである。

【X】マルクスの労働価値説

マルクスは、商品は使用価値であると同時にその使用価値を基礎にした交換価値でもあること、すなわち商品の使用価値は単なる使用価値ではなく、すでに交換価値の‘担い手’としての使用価値であることを明らかにしている。しかもこの使用価値自身は、決してこの商品の生産に要する労働の多少とは関係のないものであり、その商品の所有者・生産者自身にとっては直接問題にならないわけである。問題はその商品と交換によってえられた他の商品の使用価値にある。（相手の商品の所有者にとっても同様であり）商品の交換価値は‘ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される比率として、時と処によってたえず変動する一関係’として現れるのであり、‘偶然的なかつ純粋に相対的なもの’とも見える。しかし実はそうではないとマルクスはいう。

（イ）第一にたとえば1クォーターの小麦は x 量の靴墨、 y 量の絹等々と他の商品と様々な比率で交換されるとすると、小麦は唯一の交換価値ではなく多様な交換価値をもつこととなり、他方 x 量の靴墨も y 量の絹等も等しく1クォーターの小麦の交換価値であるから、 x 量の靴墨、 y 量の絹等は相互に置き換えられる。あるいは互いに同じ大きさの交換価値でなければならぬ。そこで一商品（ここでは小麦であるが）の交換価値を表すそれぞれの量の靴墨、絹等は一つの‘統一物’を表現していることになる。（それぞれ異なった使用価値が1クォーターの小麦の交換価値という一つのもを表しておるわけであるが、それと同時に）1クォーターの小麦の交換価値なるものは種々な他の使用価値で表されることによって、実はかかる現象形態とは異なった‘ある内容表現形式たる’に過ぎないこととなる。これはつぎのようにも説明される。二つの商品（たとえば小麦と鉄）がいかなる交換比率にあるとしても、それは1クォーターの小麦 $=a$ ツェントネルの鉄というように表わせる、この方程式は‘同じ大きさの一共通物が二つの異なった物の内にある’ことを示している。従って両者は小麦でも鉄でもない‘第三者’に等しいことになる。そこで両者はいずれも交換価値たる限りは、かかる第三者に還元されうるものでなければならない。（それはあらゆる直線形の面積が、三角形に分解され、しかも‘その目に見え

る’形とは全く異なる表現—その底辺と高さとの積の2分の1—to還元されるのと同じだという)

(ロ) それでは交換価値が還元される第三者とはなにか。(それは直線形の面積のように、同じ平面における第三者ではない) 商品の自然的・物体的属性が問題となるのは、商品を使用価値たらしめる限りでのことで、商品を交換価値たらしめるものにはこのような性質のものではない。‘交換関係の内部では、一つの使用価値はどの使用価値ともそれが適当な比率さえあれば、正に同じものとなるのである。交換関係の特徴は、商品の使用価値を捨象する点にあることとなる。しかもそれは使用価値そのものの捨象であって、いろいろな使用価値を捨象して、使用価値一般といったものに抽象還元するのではない’。(この還元は頭の中で観念的にするのではなく、日々の商品売買において現実的になしつつある還元・抽象である)

(ハ) それでは商品の交換は商品をいかなるものに還元するのか(価値論の主要な内容である)。マルクスにとってそれが使用価値であるわけではなく、使用価値たらしめる一切のものが捨象されるわけで、小麦がもついかなる自然的性質でもなく、食糧となるということでもない。小麦と鉄の交換において、各々の使用価値が無くなるのではないが、小麦の所有者にとっては、小麦はもはや使用価値ではなく、鉄の所有者にとってはじめて使用価値となる。小麦の所有者にとってはむしろ1クォーターの小麦の使用価値はaツェントネルの鉄なのである。いいかえれば小麦の所有者にとっては、一定量の小麦の交換価値は(小麦の使用価値ではないが)一定量の鉄としての使用価値として表されるのであって、それは直ちに両者に共通な第三者として表れるのではない。

マルクスは‘商品体の使用価値を離れ見たときに、残るところはただ労働生産物たる一性質のみである’というが、これは単純な交換関係からの結論ではない。かかる交換関係が繰り返し行われるためには、その背後にこれを規定するものとして、商品自身が繰り返し生産されなければならないのである。

(ニ) ところで労働生産物なる性質そのものも、商品体の使用価値を捨象したものとしてであるから、‘個々の商品の使用価値を生産する’労働(たとえば

建築労働／紡績労働等）の生産物ではなくなっている。労働生産物の有目的性質とともに、それに表現されている諸労働の有目的性質も、それらの具体的諸形態も消失するのである。それらはもはや互いに区別のない総てが等一なる人間労働、すなわち抽象的に人間的な労働に還元されているのである。そして等価物としての大きさは、それに含まれている‘価値を形成する実態’たる労働の分量によってである。このような労働も勿論労働時間によって計られるほかないが、この労働は具体的・現実的な個人の労働ではなく、労働時間も社会的な労働として計量されねばならない。このような‘社会的実体’を、商品社会はこれを各商品の価値として実現するのである。しかし同時に社会の富に関する表象が逆転する。‘一商品の生産に必要な労働時間不変であれば、価値の大きさは不変であるが、この労働時間は労働の生産力に変化がある毎に変化し、労働の生産力が増加すれば労働時間は少なくなり、価値は低下する’。それは自明のことであるが、商品ではそれが個々の商品の価値として表われるため、とくに個人的利害関係の印象から、しばしば混乱した観念をひきおこす。たとえば新しい機械が他に先んじて採用される場合、社会的平均以上の生産力をもって生産する者の生産物は、その実際に必要とする労働時間以上の社会的必要労働時間として評価されるため、より多くの利益をうるわけであるが、これから生産力の増進自体が一般に生産物の価値を増加すると考えられたり、価値が社会的必要労働時間と逆比例する関係を理解し難くするのである。

他方物は価値であることなしに使用価値でありうる。その物の効用が労働によって生じたものでない場合（たとえば空気、自然の草地、野生の立木）そのまま商品としての価値を有するものでないということは、逆にこれらの物がいかなる条件の下で商品となりうるかを考えれば明らかになる。自然的に与えられたものまたは技術発達にしろ総ての人々に解放されている限り、いかなる物を作るにしてもそれがために労働を要することにはならない。それは使用価値の生産にはいかに役立つとしても、同じ条件下の他の商品生産者にこれを商品の価値として主張しうる根拠にはならない。

さらに物は商品であることなしに有用であり、かつ人間労働の生産物であり

うる。商品を生産するためには、単に使用価値を生産するだけでなく他人のための使用価値・社会的価値を生産しなければならない。従って商品の価値として表れるものは、この‘社会的価値’を生産するに要する労働時間であって、単に使用価値を生産するということだけではない。社会的に要求されないものは勿論、社会の要求以上に作っても価値としては認められない。人間が社会的に必要とする物資を自然から社会的に獲得するための労働にしてはじめて価値を形成しうる労働となるわけである。

ただし社会的実体としての労働は、人間が社会的に労働する限り実現されるものであるが、必ずしも価値を形成するものとはならない。これが商品の価値となるためには、その生産物そのものが商品としてそれが使用価値として役立つ他人の手に（所有者にとっては非使用価値として）交換を通じて移転されねばならないのである。また物の無用・労働の無用というのは、（個人的関係のことは問題外として）社会的関係においてのことであるが、これも商品が価値をもつものとして当然に要求される場所である。

【XI】貨幣または商品流通（M）

（金の使用価値のある量によって商品価値を一般に表現する）貨幣形態は商品が積極的にその価値・性格を表現するうえでとらざるをえない形態である。個々の商品にどれだけかの労働が投下されていたとしても、商品価値は直接に一定の労働時間によって表現されうるものではなく、必然的に一商品金の使用価値で表現されねばならない。貨幣形態によって、商品自体の価値と使用価値との内的対立が、貨幣と商品との外的対立として表され、商品価値に対する使用価値の制限が現実的に解除されうる形態が与えられる。しかし同時にそれとともに商品は価値を価格として表現しながら、それ自身の側からはこの価格を実現することができなくなり、その価格は直接的交換可能の形態にある貨幣によって実現されねばならない。それでは貨幣による商品価格の実現がいかにして商品価値を尺度するものとなるか。マルクスはこれを第一の課題とする。

①金が貨幣として果す第一の機能は商品世界にその価値表現の材料を提供す

ること、つまり諸商品の価値を質的に同じで量的に比較可能な大きさとして表すことにある（諸価値の一般的尺度としての機能）。②諸商品は貨幣により通約可能になるのではない。諸商品はすでに価値によって通約可能になっているから、商品はその価値を特殊な一商品金で表現し、金を諸商品共同の価値尺度となしうるのである。従って価値尺度としての貨幣は諸商品の内在的価値尺度たる労働時間の必然的現象形態である。③金が商品世界に価値表現の材料を提供するというのは、商品の金による価値表現にはかならず、それは商品の貨幣形態すなわち価格である。ここに諸商品の最も単純な個別的形態が再現し、他方拡大された相対的価値表現は貨幣商品の特殊な相対的価値形態となる。しかも拡大された価値形態の無限の列はすでに商品価格のうちに社会的にあたえられており、物価表を逆に読めば貨幣の価値が種々の商品で表されていることがわかる。（勿論貨幣は価格をもたない。貨幣がその等価物としてそれ自身に関係することはできないからである）④このような貨幣の価値尺度機能に現実の金は必要でなく、単に観念的な金でこと足りる。（価格は商品価値形態一般と同じく商品の実在的な物体形態と区別された単なる観念的な表象化された形態だからである）⑤一商品価値を金の一定量で評価する場合、一定の時には一定量の金の生産は一定量の労働を必要とすることが前提されている。貨幣価値が一定であれば、商品価格が一般的に上昇するのは商品価値が上昇する場合だけであり、商品価値が一定ならば貨幣価値が低落する場合だけである。

ところで単に商品が一定価格をもって市場に登場しているだけでは、なお商品所有者の観念の中で商品が貨幣に転化されているだけで、現実には貨幣に転化されているわけではない。商品価格実現の過程は単に直接的な商品の交換関係としてではなく、貨幣を媒介にした諸商品の社会的関係すなわち商品流通として行われる。マルクスはこの商品流通を商品 (W) → 貨幣 (G) → 商品 (W) として表示して‘商品の変態’と規定し、それがいかに実現されるかを課題とする。

マルクスは商品の交換過程は商品の貨幣への転化 $W \rightarrow G$ と貨幣から商品への再転化 $G \rightarrow W$ という対立しつつ互いに補いあう二つの変態として行われるとし、その全変態過程 $W \rightarrow G \rightarrow W$ を‘買うために売る取引’と特徴づけてい

る。マルクスはこの過程を二つに区分して考察する。

(a) W-G 商品の第一変態 ‘売り’。これは商品にとっては命がけの飛躍であり、これに失敗すれば商品所有者には痛い、必ずしも成功するとは限らない。貨幣は他人のポケットにあり、商品所有者がそれを引き出すためには、その商品が貨幣所有者にとっての使用価値でなければならない。商品に支出された労働が社会的に有用な形態で支出されており、社会的分業の一環として認められねばならない。しかし分業は社会的な生産有機体をなしておるが、商品生産者は個別的・無政府的に生産しているのだから、彼の商品が社会的分業の一環として公認されるかどうか、仮に彼の商品の使用価値が社会的に必要なものと認められたとしても、彼の商品が価値どおりに売れるとは限らない。社会的に必要な労働時間そのものが彼の背後で変わることもあろうし、価格の実現は偶然的なものでしかあるまい。商品は貨幣を恋い慕うが ‘まことの恋が平らかに進んだためしはない’。無政府的な分業態勢による社会的生産有機体の量的編成は質的編成とともに自然発生的・偶然的であるからである。

ともかく商品が貨幣へと形態転換するということは、商品と貨幣との持手転換または場所転換である。従って一方で商品が観念的にもっていた自身の価値姿態である貨幣に現実には転化したとすれば、他方貨幣の方ではそれが観念的にもっていた使用価値を現実には実現して商品に転化している。従って商品の貨幣への転化は同時に貨幣の商品への転化である。(W-G は同時に G-W である)

(b) G-W 商品の第二変態 ‘買い’：ここではすでに貨幣が他の総ての商品の脱皮した姿をなすものとして、それ自身絶対的に譲渡されうる商品であるから、W-G のような困難はない。(一度貨幣に転化してしまえば、どのようにしてそれが行われたか、何がそれに転化したかは一切問題にならない) 貨幣は売られた商品全体を代表すると同時に買われ得る商品全体を代表する。こうして貨幣への転化を切望し一定価格を表示している商品は、貨幣にとってはどういう商品がどれだけ買えるかというその転化能力の限界を示していることになる。ところで G-W は再び同時に W-G であり、従ってある商品の最終変態はさらに別の商品の最初の変態となる。ところで売り手はしばしば彼の商品を一度に

大量に売って $W-G$ を実現するが、他方 $G-W$ は彼の多方面の欲望によって多数の買いに分散される。従って一つの売りは多数の買いに分かれ、一商品の最終変態は、他の諸商品の第一変態の合計をなすのである。

マルクスは以上を総括して、①ある商品の総変態は $W-G$ と $G-W$ という互いに補いあう二つの反対運動からなり、同じ商品所有者が商品の二つの変態運動に相応して、あるときは売り手に、あるときは買い手になる。両者は固定した役割ではなく、商品流通のなかでたえず人を変える役割である。②商品変態は商品形態→その脱ぎ捨て→商品形態への復帰という一つの循環をなしているが、出発点は非使用価値であり、終点では使用価値であるから、同じ商品でもここでは対立的に規定される。他方貨幣はまず商品の価値結晶として現れ、後には商品の単なる等価形態として消失する。③商品流通は形態的にだけでなく実質的にも直接的な生産物交換から区別される。生産物交換ではAの商品とBの商品が互いに交換されるが、商品流通においては、AにとってはBの商品と交換できたが、BにとってはAの商品との交換は一般には行われず、BはBで他の商品を買う。従って商品流通では生産物交換の個人的・局地的制限が打破されて交換関係は発展する。商品流通は物々交換のように交換の実現とともに消えるのではなく、貨幣は一商品の変態列からは脱落しても消え去るのではなく、商品が去ったあとの場所を占めて流通する。いわば流通は絶えず貨幣を発汗しているのである。

マルクスは、J. ミルの“総ての商品に対して買い手が足りないということはありません。ある商品売るために提供する者は、つねにそれと交換にある商品をえようと欲している。だから彼は売り手であるという単なる事実によって買い手なのである。だから総ての商品の買い手と売り手を総括すれば、形而上学的必然によって均衡が保たれなければならない”を、商品流通と直接的生産物交換との相違を単純に捨象したものだと批判する。

売りと買いは一方では両極に対立した二人の人間の同一行為であるけれども、他方同じ人間の行動としては二つの対極的に対立した行為である。売りと買いの同一性といっても、流通界では商品が貨幣所持者によって買われず無用にな

ることも、さらには売られたとしてもすぐには買わず一時的に休止点を形成することもある。流通は売りと買いを分裂させることがある。しかし両者は‘外的には’独立し相対立しても、相互に補い合い‘内的には’統一したものである。そして内的に統一しているにもかかわらず、外的な独立化が進めば、統一は‘暴力的に’（さらに複雑な条件を要するが恐慌によってでも）貫かれる。商品に内在する使用価値と価値との、私的労働と社会的労働との、具体的労働と抽象的労働との、物の人的関係と人の物的関係との対立・内的矛盾が、売りと買いとの対立として現われているのである。このような商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段の機能をもつこととなるのである。

金価値を与えられたものとすれば、流通手段の量は‘実現さるべき’諸商品価格総額によって規定され、さらに各商品類の価格を与えられたものとすれば、価格総額は流通にある商品量によって定まり。さらに各商品種類の価格を与えられたものとすれば、商品価格総額は流通にある商品量により定まる。さらに貨幣の流通速度を考慮せねばならず

$$\frac{\text{諸商品価格総額}}{\text{同名の貨幣片流通回数}} = \text{流通手段として機能する貨幣量}$$

ということになる。この法則は一般に妥当する。

‘貨幣流通速度が流通手段量の不足から生ずる’という俗説は誤りで、貨幣流通が商品自身の形態運動の現れであるように、貨幣流通速度も商品の形態転換の速さの現れである。従って貨幣流通が速いということは、W-G と G-W という両過程が流動的に統一されていることを表し、逆に緩慢であるのは、両過程の分離と対立的独立化（形態転換、物質代謝の停滞）の現れである。

（c）貨幣が流通手段として恒常的に機能するようになると、貨幣の鑄貨形態が生ずる。価格の度量標準の確定と同じく鑄造は国家の仕事となる。鑄貨は金銀が国内的流通において身につける国民的制服であり、世界市場ではそれは脱ぎ捨てられ地金に復帰する。金鑄貨は金地金とただ外形を異にするに過ぎず、金は一方の形態から他方の形態に転化されうる。しかし流通しているうちに金鑄貨は摩滅して実質純分とその称号とが分離することになり、同名の金鑄貨で

も重量が異なるために価値を異にすることになる。（流通手段としての金は価格の度量標準としての金から離れ、諸商品の現実の等価物ではなくなる）貨幣流通が鑄貨の実質純分を名目純分から分離（その金属定在をその機能的定在から分離）させるとすれば、貨幣流通は（金貨幣が鑄貨として機能する限りでは）他の材料からなる章標・象徴によって代位しうる可能性があるわけで、銀あるいは銅の補助貨幣が金鑄貨の代用として通用することになる。さらに相対的に無価値なもの、紙幣も金にかわって鑄貨として機能しうることになる（ただしそれは強制通用力をもつ国家紙幣だけのことである）。ただし紙幣の発行は、紙幣によって象徴的に表される金が現実に流通できる量に制限されねばならない。紙幣が流通過程の貨幣吸収力の最大限まで発行されると、商品流通の変動の結果紙幣が必要量を越えることがある。このとき一紙幣片が代表する金量が、名目的に代表するはずの金量以下になる。その結果は価格の尺度としての金の機能に変更されたのと同じで、たとえば以前は一ポンドという価格で表現されていたと同じ価値がいまでは二ポンドという価格で表現される。このような紙幣の特殊な流通法則による価格騰貴がいわゆるインフレーションをなすのである。

ついでマルクスは価値尺度、流通手段の貨幣を‘統一’したものとしての第三の規定、すなわち‘富の物質的代表物としての貨幣’あるいは‘貨幣としての貨幣’を解析する。

このような貨幣は‘貨幣蓄蔵’・‘支払手段’および‘世界貨幣’という三つの規定を含み、こうした三つの規定は、それぞれの機能によって流通過程に必要な貨幣量を調節するものとなる。そしてこれらの機能を通じて貨幣の全く新たな使用方法（‘資本’としての貨幣）を発展させることとなる。

a) 貨幣蓄蔵

マルクスは貨幣蓄蔵を $W-G-W$ の $W-G$ と $G-W$ との中断によって貨幣が不動化され、鑄貨から貨幣に転化されるということから展開する。そして商品流通の最初の発展とともに、 $W-G$ の産物である商品の金蛹を固持する必要と熱情とが发展し、商品は他の商品を買うためにでなく、商品形態を貨幣形態に

よって置き換えるために売られるようになる。すなわち W-Gが物質代謝の単なる媒介から自己目的になる。こうして貨幣は商品を購入しつつ流通することを阻止されて、‘蓄蔵貨幣’に化石し、商品の売り手は貨幣蓄蔵者になるのだという。マルクスはこれを商品経済の歴史的過程によって説明する。

①商品流通が始まったばかりのときには、使用価値の余剰だけが貨幣に転化され、金銀はおのずから余剰または富の社会的表現となる。これは貨幣蓄蔵の最も素朴な形態であり、これが永久化されるのは（欲望範囲が閉されているような）自給自足の生産様式をもつ民族の場合である。②商品生産がさらに発展すると、商品生産者は‘社会的質物’たる貨幣を確保しなくならなくなる。彼の絶えざる欲望を充たすには他人の商品を買わねばならぬが、他方彼自身の商品の生産と販売は時間を要し、また偶然に依存している。このため彼は売ることなしに買う必要があるが、このためには前以て買うことなしに売っていないなければならない。それは一般的規模では行われえないように見えるが、貴金属の生産源では売ることなしに買いが行われており、それ以後の買いなしの売りはこうした金生産源から流入した金が商品所有者の間に再分配されるのを媒介するだけのことである。こうして交易のすべての点に蓄蔵貨幣が生ずる。

ついでマルクスは貨幣蓄蔵の特殊な規定性を明らかにしている。すなわち①貨幣蓄蔵の衝動はその本性上無制限である。しかし同時に現実にはどの貨幣額も一定の量に制限されたものであり、効力を制限された購買手段でしかない。ここに貨幣の量的制限と質的無制限との矛盾が生じ、これが貨幣蓄蔵者を無制限の貨幣蓄蔵へとかりたてるのである。②貨幣を蓄蔵貨幣として固持するためには、貨幣を享樂の手段にすることを阻止せねばならず、勤勉・節約・貧欲が貨幣蓄蔵者の主徳であり、多く売って少なく買うことが彼の経済学の全体である。③蓄蔵貨幣の直接的形態とならんで、金銀商品の所有がある。これはブルジョア社会の富とともに増大し、金銀の貨幣機能から独立した‘金銀市場’を形成し、貨幣の潜在的供給源となる。

最後に要約して、貨幣流通量は収縮・膨張が可能でなければならず、鑄貨から貨幣へ、貨幣から鑄貨へと調節できねばならない。そのためには一国にある

金銀量は鑄貨機能を果しつつあるものより大きくなければならず、この条件が蓄蔵貨幣により充たされるのであり、こうして‘蓄蔵貨幣貯水地は同時に、流通する貨幣の流出入の水路として役立ち、流通に必要な貨幣量を調節するものとなる。’

b) 支払手段

商品流通の発展とともに、商品の譲渡と価格の実現が時間的に分離する関係が発展する。

商品所持者は現にある商品売り、買い手は貨幣の単なる代表者として買うのである。こうして売り手は‘債権者’に買い手は‘債務者’になる。同時に貨幣も別の機能を受け取って‘支払手段’となる。その機能は、①売られる商品の価格規定において価値尺度として機能する。（商品価格は契約により確定され、それは買い手が一定期間後に支払うべき貨幣額の大きさを示している。）②貨幣は観念的な購買手段として機能している。貨幣はただ買い手の貨幣支払約束のうちに存在するに過ぎず観念的存在であるが、それが現実商品に持ち手変換を引き起こす。支払期限に達したとき、支払手段が現実流通に入り、貨幣が買い手から売り手に移る。それは商品流通過程を媒介するものとしてではなく、商品はすでに流通から出てしまっており、貨幣は一般的商品として過程を独立的に閉じるのである。③支払手段としての貨幣を生ぜしめる商品変態の変化は、商品を買う（第一変態）よりさきに第二の変態を行うことである。売り手の商品は流通するが、その価格は私法上の貨幣請求権に実現しただけである。（商品の第一の変態は後で追加的に完了するのである）

支払貨幣は、現実支払が行われねばならぬ場合には、貨幣は流通手段のような単なる媒介的機能だけでなく、交換価値の独立の定在、絶対的商品として現れるのであるが、マルクスはこれを支払手段としての貨幣の機能における媒介されない矛盾といっている。この矛盾は貨幣恐慌の瞬間に爆発する。貨幣は突然計算貨幣という単なる観念的な姿から直截に硬い貨幣に急変する。恐慌においては商品と貨幣との対立は絶対的矛盾にまで高められる。いまや商品はいかなる価値もなく、貨幣こそが唯一の富となり、世界市場の靈魂は貨幣を慕

い喘ぐのである。

こうした支払い手段としての貨幣の機能から商業手形・銀行券という‘信用貨幣’が生ずる。これは債務証書そのものが、さらに債権の移転のために流通することから生ずる。他方信用制度が発達すれば、支払い手段としての貨幣の機能も拡大される。そこでは信用貨幣が大口の商取引の部面をしめ、金銀鑄貨は主に小口取引の部面に追い返される。

c) 世界貨幣

マルクスは貨幣の総括的規定として‘世界貨幣’を、国内流通に対する世界市場という具体的な関係によって説明する。

国内流通では、貨幣は価格の度量標準、鑄貨、補助貨、価値章標という国内流通特有の形態をとるが、その外に出て流通することになると、これを脱ぎ捨て再び貴金属の元来の地金形態に逆戻りする。世界商業では、商品は普遍的にその価値関係を展開し、従ってそこでは、諸商品に対しても貨幣が世界貨幣として相対する。貨幣は世界市場においてはじめて普遍的な価値形態として、（抽象的な人間労働の直接に社会的な実現形態である商品として）貨幣の概念に適合した定在様式をもつ。（マルクスは当時の事実から世界市場では金と銀が価値尺度として支配するという）。

まず世界貨幣の機能をみると、それは一般的支払手段、一般的購買手段、富一般の絶対的社会的物質化として機能する。とくに支払い手段としての貨幣は国際貸借の決済のために、他の機能に優越する。国際的購買手段の機能は諸国間の在来の均衡が攪乱されたときに見られる。また富一般の物質化として機能するのは、（商品流通と関係なく）一国から他国への富の移転が行われる場合であり、また商品形態での移転が景気の状態か商品種類により不可能である場合である。

国際的な商品流通が発展すると世界貨幣としての準備金の蓄積が必要となり、蓄蔵貨幣の機能は世界貨幣の機能からも生ずる。そこでは現実の貨幣商品たる金・銀が要求される。

世界貨幣の流れは第一に金生産源から各国内流通部面への流れ、第二に為替

相場の振動にともなう各国間の金の流出入という二重の運動をもっている。各国の国内流通に入った金は、流通手段として機能するほか、摩滅した金銀を補填し、奢侈品材料を供給し、さらに蓄蔵貨幣に凝固する。

ブルジョア的生産が発展している国では、銀行に集積される蓄蔵貨幣は必要最小限に制限される。（この蓄積が過大な場合はむしろ商品流通の停滞，商品変態の流れの中断を示すものといってよい）